

DANH



3

栄光学園蹴球部

DASH

No. 3



目 次

今年一年の回顧	=七期生	主将=	佐々木	民雄	2
今年こぼは	八期生		宇佐美	淳	6
五周年記念に寄せて	父兄		塙谷	成策	8
対堺崎戦を終って	七期生		篠塚	俊生	10
万屋風景					14
人物寸描					16
遠征の記	八期生	…防衛大学	塙谷	晋策	17
中学冬季県大会	…大泉 雄司・内山 正樹				19
第一回戦					
第2 "	=準決勝=				
第3 "	=決 勝=				
第4 "					
技よりも気走	四期生		泉頭	篤二	24
薙斗の後に					26
上智大の蹴球部活動	四期生		佐野	光雄	27
創立五周年記念祭			生駒	直樹	29
殊勲賞			石原	博	30
都市対抗					31
蹴球部に入って	十一期生		北村	富治	33
			多田	康	34
			中村	公也	35
中2の文集					36
初試合			町田	晶生	36
対三崎戦 四点入れて			小沢		37
対片瀬中戦 B戦の事			塙野	暉一郎	38
最大の疑問	40	・後記			40

今年一年の回顧

＝七期生・主将＝

佐々木民雄

僕達の青春に大きな喜びと、豊富な経験とを与えてくれたこの波瀾多き一年は終つたが、この一年をふり返つて高校チームについて述べてみようと思う。「この高校チームの一年の歴史を述べる時、十

月二十六日という日を僕達は忘れられないものである。

この日は僕達にとり記念すべき日であった。それはあの防大戦である。この試合は僕達の最高目標全国大会予選在一週間後に控えて、今までの練習の総まとめとして

行なわれた。そして1-0で勝つたのである。「この一勝は夏の東日本多き一年は終つたが、この一年本大会が終り高3が抜けて三連敗して以来初めて得た勝利だった。

1-0ながらこの一点は僕達をして県の優勝まで導びかしめた原動力であった。この一点は、全く自信を失つていたチームに希望の匂をかけ、僕達でもやれるぞ！という自信と高い所——優勝——をうつすらと見せてくれた。この日の日記には試合のことばかり十三頁も

には目標の見えた喜びの色が明らかに見えた。自信のあるなしは月とすっぽんの差である。この目標のみえてわずかながら希望と自信を付けたチームは僅か一週間の中に無い物を得ようとする力――

ファイト――を充実させ、一回戦にのそんで緑ヶ丘を4-1、川崎を4-0で屠り、増々自信を高め勝進み遂に決勝まで進出し、最高のファイトで最高の試合をなし、晴れの二年連続優勝を成し遂げたのだ。

優勝の時の喜びは例えようもなく、部生活最後に得た喜びだつた。この日は小雨で応援も少なかつたが、何もかも出し切つた試合の後のランニングの時、先輩や中学

生達は僕達の地に着かない様なランニングを通す花道を作ってくれ

た。新聞社の人が写真を取つてくれた時、あの嬉しそうな皆の泥だらけの顔、特に僕の顔、あの嬉しさに泥をミックスしたようなあんな顔は作るうつたつて作れるものではない。

僕はその時迄何年か涙を出した事は無かつたが、うれし涙というの、が初めて出た。以後一週間といふものは授業なんぞ荒然としてトンと聞えなかつた。

この嬉しさは皆が恐らく初めて味わつたに違ひ無い。そのうれしそうな顔を見る僕は、又一人一倍嬉しかつた。

何故そんなに嬉しかつたの、だるう。それにはそれ相当の理由がある。「不可能」と思える事が、ひた向な努力によつて実現出来たからだ。これを述べるには、一年前

に逆上らねばならない。一昨年の事は無かつたが、表面的には出なかつたチームは表面的技巧に頼り過ぎ基礎に欠けていたから、東日本も全口大会も得た教訓は走る事と蹴る事だった。だから当然新に全力となるべき僕達にはそれ以上に基礎が欠けていた。又僕達の学年は、

高一の向革やかな成績の影になり試合もろくにしなかつたから、そこの一年は殆んどアランクに近いものであつた。そこで僕が新キャプテンに就任してからは、並大抵ではないとは充分自覚しながら、篤さんの「自己のペースで」という言葉に従い、じっくりと基礎から始めた。それが奥に高二の四日の事で内容と言つたら中一の皆さん驚くながれ、君達と同じアレイスキックとランニングをやつたのだ

いたから別に表面には出なかつたが、未だその頃には実力はついてなく、それは高三が抜けた僕達だけでもやる事になつた八月四日の石神井戦の時に表われてしまつた。それは全くみじめな試合だった。

4-10と完敗、一年中で最も暑い時、八月の初めの炎天下で、おされ放し。猛烈に疲れ、恥かしいが、ハーフタイムに誰か代わつてだったので、僕が新キャプテンに就任してからは、並大抵ではないとは充分自覚しながら、篤さんの「自己のペースで」と云う自分もそんな気持ちだった。後半大勢。何んだ！ だらしがな！ と云う自分もそんな気持ちだった。後半、僕が捻座し、皆のファイトも失せ、崖から叩き落されたライオンの子の「ごとく」に我々の出発は全く惨憺たるものであった。これも僕がペナルティで畜生の一点をたたき込んだのみで1-1の惨敗、これも石神井戦同様、ファイトのない試合だった

これで実に三連敗を喫して、ドン

底は全くみじめなものだった。

Y校戦以来、チームの中には「中立」が上つてこれければ駄目だ。僕達は犠牲になつたのだ。」といふ悲観論が聞え、それがチームを支配した。元気な中学生に対し、自分達の苦傷を抉ぐるような気持ちだが、全くチームは勝利に対する情熱を失い、勝利を欲しない様な感じだった。

悲観という障礙を如何に破壊すべき、無いものに対する憧憬と情熱、それを得ようとする意志を持った者は死者に等しく、死者の周囲は「不可能」の壁である。「あらゆる大事業は不可能よりはじめると」——カラライルーしかし決心した人の正しい目的で集中された意志、その前に「不可能」の壁は

存在しない。

すのである。

シリハシ作作開始、僕達のチームは高一の間の空白というハンデ突いているが、何もあきらめるには及ばない。もう一つ、出せばいくらでも力を出すファイトというものがはあるじゃないか。それは目標に対する激しい情熱だ。まだあきらめるには早い。それこそ取越苦労というものだ。やるべき努力を全うしてない。ハントエキヤップとは外部的条件で、自分達の手ではどうする事も出来ない。優秀な馬程ハンディは重い。その中で全力を尽くせばよい。否全力をつくさねばならない。全力をつくせば彼は勝つても負けてもそれは知

りで、大きな目標をデンとすえ、予選までの二カ月向左頭をまるめて山に「」もるような、全く新たな気持ちでふり出しからやるのだ。「自分達の手での優勝旗を角び得るのだ」と激励しつつスタートした。それは九月初めだった。しかし、未だ皆が勝利の目標を得て一つにまとまつたわけではなく、曖昧であった。「いったい勝つ気があるのかな。」曖昧ながら二つ構進をはじめた。

運動会の召集の仕事があつた。素晴しくまとまつた。そしてこのまとまりと勝利に対するまとまりの間に干渉はなかつた。
僕達としては栄光に於ける蹴球勝利者である。とにかく全力を尽

生もう残念もないかもしだれない最後を飾るべきインターハイ。それを控えて、勝利の目標にがつちりとまとまらなければならぬ事を痛感した。

「この辺から僕の滅茶苦茶な生活が始まった。どうしようか、こうしようかと思ふ頭の中は、部の事、とりわけ高校チームの事だけになつた。そして毎日寝るのは翌朝一時頃。又、何か気にかかる亡、学校の帰り路であるうと仲間の家を尋ね、家に十二時頃帰つたりした事が度々であった。誰かがスーパー・マンなどと云つたが、僕は超人でも何でもなく、たゞ緊張のなせる技であった。そんなわけで体力が精神力に追いつかない体はグランドでは生気がない。しかし体力は或る者の精神に叱咤激励

して呼びかける。あんまり反応がなくて一人で怒鳴つてゐる自分は、何んだか馬鹿みたいに思えた事もあった。声がないのは勝利に対する執着のあまさから來てゐるが、しかし勿論誰一人としてさぼる者等は居なかつた。あとちょゝと熱すれば発火するまでになつていける。昼休み、放課後にはいつもボーリングが飛ぶ机になつた。中学生も混つて毎放課後ボールの乱舞飛ぶ有様は未曾有である。いよいよやる気が出て来て、最後の追込みにあらゆる時間を使つてゐるのだ。

「こゝでやつたのが防大戦、この日が、十月二十六日なのだ。チームの熱はここで発火点に達し、ダーナマイトを爆発させ、一挙に優勝したが、十代二十六日なのだ。チームの優勝を予想しよう。」と先輩は云う。ドン底から立ち上り、全てを尽して勝利を得たと云う事を「一二」で面白いと云つては不適当だが中学も同様のケースであった。

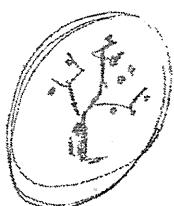
で滅多に凡邪などひいた事はないがつたが、この試合は注射を打つてまでやる事になつてしまつた。しかし凡邪も皆の顔を見て治つた。それからと、云うもの、決勝まで四回戦、チームは一心同体となり優勝に向つて突進し、優勝を得たのだ。危なげな道をたどりながら、最後の瞬間でまとまり、「ゴーリに飛び込んだとは云え、やはりこれは日々の地味な努力、ヒリわけ夏休みの三連敗以後の努力その上でのまとまりがものを云つた訳だ。

セントジョセフに、4-0と惨敗し、篤さんの叱咤激励の下に勝利を得たのは中亘であった。両者相互通ずるのは粉れもなくファイトによつて勝利を得た事だ。

高校チームは県では優勝したが、甲府に遠征しては誰崎に破れて二年連続出場はならなかつたが、来年は神奈川から一校代表が出せることになつたのだから条件もよくなつた訳で、是非高工、中亘の諸君、あの旗を取りもどすよう頑張つて下さい。

昨年のチームを見ると基礎をやつた甲斐があつて、キック力が不足する事はなくなつたが、反面チームワークの練習が出来なかつた。しかし基礎をつけた高工諸君が、パスワークの練習に専念出来るなら幸いです。僕達の念願を代つて

果して下さい。一年間こう終つて、中学指導に来て下さり、また僕みて、本当に部生活の喜びを感じ達を励まして下さつた篤さんには、何にも増して素晴らしい経験の出来、感謝のこゝばもありません。来た事を感謝します。又毎日



今年こそやは

八期生

宇佐美 淳

月の全国大会、第六がその他の練習試合、親善試合等の諸試合である。先ず新人戦であるが、この試合には栄光はまだ優勝した事がない。しかし今年は、メンバーが今までと殆んど変りがない。その他条件はそろつているのだ。一戦一戦を確実に進めて行けば、今の栄光の実力として優勝も決して夢でない。優勝したいものだ。第二の県下の選手権大会は昨年は地区別制で行われた。栄光は相洋、県立鎌倉高校、吉田島農校と一地区を形成して行なつたが栄光は最終戦相洋に前半早々コーナーからのフワシとしたボールをヘディング・シュートされそれが最後までたたって結局一対〇で負けてしまつた。今から思えばあの試合だって負ける試合ではなかつた。今年は地区別になるかどうか解らぬが高一（九期生）も加わつた眞の栄光学園サッカー部として勝ち抜いて行かなければならぬ。や三の東日本大会は今年から廃止されて関東大会として浦和で行われる事になつた。これには三十二校つまり神奈川県から四校が五校参加できるからこれには行けるであろう。上位入賞を狙おう。次の国体はいつも成績が良くない

し、それに勝つても本大会に出場する事は学校の方として殆んど不可能であろう。しかし神奈川で優勝して参加权を持つていながら出場出来ないなんて事になつたら残念である。第四の全国大会は今度神奈川県独立で一校出場出来る事になつた。もう一年早くれば良かつたのにと思うが仕方がない。今年は全国大会を第一の目標としてがんばろうではないか。

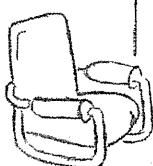
現在の栄光の実力から想像すると神奈川県で一位となる事は決してむづかしいものではない、小田原市で慶應だつて勝てるのである。栄光は他校より練習時間はずつと少ない。その少ない練習時間を効果的に使つて後の足りない所は気力（ファイト）で補なつて行こう。づらづらと書いて来たのは結論として現在のチームが試合する時、練習の方法そしてファイトによつては技術が少し位劣つていても絶対に勝てるという事をいいたい為であった。そうだと勝てるのだ。サッカーをやる以上試合をやる以上勝たなければならない。勝つためには何といつたつて練習次だ。今からすぐに練習だ。加藤キヤステン

のもと、栄光学園蹴球部の名のもとに一致團結して
勝利の栄光を我等の頭上に高く輝かそう。—おわり—

昭和三十三年一月二十五日

五周年記念に寄せて

塩谷成策



『オイ、ゴールキーパー、ゼッタニユースだぞ。』
とうとう持丸商事が手を引いて、本社駄占・キロ三
十円で入札決定となるらしい』

『本当か？そいつあ豪氣だ。だが少し話がうます
きるぞ。ウインタに偵察させろ。直ぐ情報集めて
来いって云つて呉れ』これは小生友人の会社アト
ラス商事KK内の会話の一部である。

今から三十年も昔の事、我が母校暁星中学はサッ
カーレの黄金時代が続いた。当時歯向ふ敵無く全く
独走していた。その時の紅旗の少年達が今では白
髪のおやぢに変ってしまったが三十年後の今日、
当時の選手達がそつくりそのままスクラン組んで

作戦會議をして会社を運営している。實に珍しい会
社である。社長が独りワンマンになつたり、社内派
閥が生じたり、とかく人の集りには人争のゴタゴタ
が生じるものだが、此のアトラス商事は役名こそあ
れ、すべて平等、喜々として毎日試合にのぞんでい
る。拓て諸君、僕の言いたい事はサッカーの良さ
はたゞ勝負を争う事のみではない。無論勝負である
以上勝つ事は目的であるが、サッカーのチームワー
クは一人の英雄を作らない一人の宮本武蔵を作らな

いで、各々その分を守つて共同の力で斗い勝つ事に

ある。雨の日も雪の日も、試合を投げずに泥まみれになつて斗う事である。負傷者が出ても補給を許されない厳しいルールは野球と違つて実戦の戦斗と同じである。

此の戦斗精神は、ガツチリ組むチームワークは、自然と養なはれて、先輩後輩が苦楽を共にしてこそ初めて力強く結ばれてゆくものである。日本人は昔から一人の名人を貴ぶ様に教えられて来た。

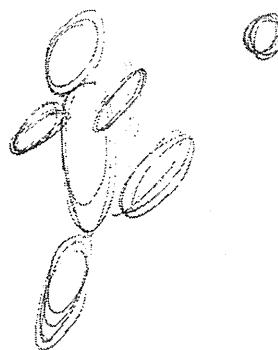
一人の英雄を夢見るが、英雄名人なんてそんなにザラにあるものではない。従つて、名人バラ／＼な利己的な弱い存在になつてしまふ。互いに反目して互いに相殺している。共同の力、団体の訓練が全く下手である。「これは日本人の大きな欠点の一つであるがサッカーによつてこれが自然に教えられる。

アトラス商事は必ずしも通例とは云えないが、三十年と云ふ長い月日、人生の大半を雨の日風の日もガッチャリとスクランム組んで、元気に朗かに効いている、その事だけが会社が儲かるとか大きくなるとか云ふ事よりも、一そゝ貴しと心から云いたくなる。

崇光サッカー部よ、頑張れ

附記

(アトラス商事はスポーツマンシップで商売しているので、いつも儲けそこなつて損をし、余り会社としては上成績ではありません。気の毒に、浮世とはこうしたもののです。)



遠

征

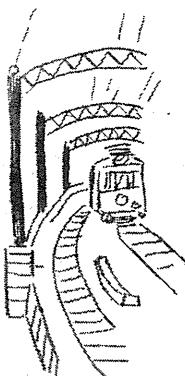
日

記

▼防衛大学遠征記

▼対藍騎戦を終つて

▼万屋風景



防衛大学遠征記

塙 谷 晋 策

て予定していた対防大戦（二軍）「あつて彌大なもんだなあ」としきを行つた。

馬堀から乗つたバスは特別に我々にあつらえたようだ。他に誰も

乗つていないので、さつそく学光リに感心する。バスの停車場には、防大のサッカー部の人、チャーチューも迎えて下さる。

一九五七年十月二十六日（土）

（うすぐあり）

台凡十九号が函東南方海上を通じて、天気もまだ回復していな

過して、天気もまだ回復していな

い、この日、我々蹴球部は、かね

台凡十九号が函東南方海上を通

る人が言うには「さすが防大だけ

お世辞にも良いブランドとは言

い、この日、我々蹴球部は、かね

る人が言うには「さすが防大だけ

お世辞にも良いブランドとは言

えない、いわば田園の中に所々、聞いてやくなよ……おじりでも出

草がはえているようなグラウンドに出て、試合前の軽い練習をする

いよいよ試合開始

前半栄光がチャンスをつくつかんで一点先取した。がその後、クラシコントライションが悪いため両軍得点ならず、試合終了の木イッスルが鳴り、結局、一対〇、で勝利をおさめた。奥に春の対相洋戦以来五試合目の勝利であった。

試合の後、第一大隊の前で記念撮影をし、皆のまことに頬をカメラにおさめた、凡呂があるので皆よろこんで入り体を清めさっぱりとする。皆、着換がすんだ頃、チャーシューと早川さん(栄光卒業生)が、防大内外部を案内して下さる、その後で……エヘヘ……

栄光学園1 { 1 - 0 } 0 防衛大学
0 - 0 { (二軍)

つぽらしきを落としてしまい、騒動持ち上つたが、防大幹部の協力(?)により無事見(か)つた。

そして我々は、早くも夕暮のもうのたちこめた小原台の高台に白くかすんで立ち並ぶ建物に別れを告げバスで一路ネオンのはなかな高須駅へ帰つて来だ。

電車が田舎に通じて、いたどり、中学生部員が乗つて来た彼等も今迄、練習していたのだつた。しかし我々が今日の自慢話をすると、練習のつかれもどこえやら、自分達が勝つた様に喜んでくれた。



対 薩崎戦

を終つて

七期生 篠塚 俊生

非あらためるべきである。

電車が走り出してから甲府へつ

くまでがまた退屈であつた。」チ

キショウリ体がムズムズしやがる。

大学のコークから聞いてくれた薩

幸い電車がすいていたから省まと

崎の戦い振りと、それに対する対

十二月七日（土）

いよいよサッカーチーム、とくに我々高校生の待ちに待つた日だ。列車の時間の関係等で皆ボストンバッタに勉強道具をつめこんで登校、甲府は寒いというので不精な奴を除いては全員完全なる冬仕度。その日の四時間目のベルが鳴るのが待ち遠しかつたこと。それからしばらくして後、皆の細かい行動はわからぬがとにかく四時二十五分発甲府行列車に乗り込む。二、三人の者がなかなか現れず気をもませたがこれ等は後の機会には是

幸い電車がすいていたから省まと

誰か出迎へに来ていないか探しに

がだれも来ていず無礼なやつだ。

さて我々はついに旅館万屋につ

く、駅から七、八分の甲府市のド

マンナカ。当腰がへつているので

仕度が遅れたのか食事は大分遅れ

て八時頃やつと食事。「これではま

すい、食べ終つて九時過ぎではコ

ンテイションの調整がむずかしい

て八時頃やつと食事。「これではま

すい、駅からトクさんの怪談を聞

いてねむりにつくが、なかなか眠れない。なれないせいか、又明日

の試合を思つてか……。

十二月八日（日）

そんな事をいつても皆食べている

時は無邪気なものだ。がやく、朝六時起床、すがすがしい朝だ

霧が降りたのか窓ガラスには水滴

がいっぱいしている。泣いても笑っても今日だ。皆の心には「よし、やるぞ。」という気持が湧いていただろう。起るとまだ誰れも起きていない甲府の町を体操ランニング、その時のエールの気持ちの良さ。さあやるぞ。朝食は食い過ぎて動けなくなるのを心配して皆控え目に取る。

もう一度傾向と対策をねり、健斗を誓い、自由時間、甲府の町をうろつく。店に入ると店員も今日サッカーの試合があるのを知っている。なる程サッカーの盛んな所だ。

十時半試合場である和田町総合グラウンドにのり込む。いつ見るとまだサッカーフィールドには誰も来ていず、ラインも引いていない。何とか抜子抜けがした。しかし試合開

始三十分位前になるとさろぐ現れた。選手、オヤオヤ驚いた、応援のものがゾクゾクつめかけ座に坐った。神奈川県では見られないことだ。再び「こちらのサッカー熱に驚く。球場に途中なにか緊張で体中ががつと熱くなつたがいざ練習がはじまると不思議と落つい

てきた。そして十一時よりとの予定の時刻にかなり遅れて開会式がある。我が主将の佐々木よりあの赤旗が返かんされる。ナーニほんの一時間半ばかりあづけるだけだと全員自信に満ちた気持でそれを見守る。

敵のキックオフ、索のじよう敵はボールを左へまわす。そしてそれがセンターライン渡る。しかしそれはセンターの体を離れて誰もいなければセンターラインを点々、ダッシュして蹴り返した。そして今度はこちらの攻撃だ。まず左えまわり、それから右側へ、しかしこれを味方フォワードは失した。ナーニ・ドンマイ、ドンマイ、更に味方の攻撃は続く。思つたより敵は強くない。こう思

くれた先輩穂原さんや三田さんの話で大体敵の傾向がわかつた。まずフォワードはセンタースリーが強く、ウイングは左の方が強い。バックスは大したことではない。よしこれなら我ガフォワードはかなりの得失も可能だろう。こうなつたらバックスが最小得点に抑えればいいんだ。

つたのが悪かったのだ。フォワードは次に訪れた二つかなり決定的なチャンスを逃した。そしてこれを転機に垂崎は調子をあげてきた。コンビがひどく良い、タテパスをおりませたショートバス戦法センタースリーのコンビが特に良い。皆よく動き、正確にバスをする。「れなども神奈川県のフォワードには見られぬところだ。そして再三、再四敵はショートバスで味方陣内へ斬り込む、栄光バックスははじめはよく防いでいたが、非常に多くの観客のやじにあがつたのか、調子が出ないのが次々に敵の左側からきたボールはセンターがスルーパスでライトインナーへ、そしてシュートせんとする、僕はタックルで逃れんとして

突込んだがボールは足へ当つて弾びレフトウイングへそしてゴール前の混戦からフッシュされ先取点を許す。」の一点で敵は完全に調子づいた。得意のショートバスはスをますますこえ、観舞はますますうるさくなり、我が栄光イレヴンはほとんどの上り気味、バックスはコンビ悪く、相手のショートバスにかくらんされボーリングとしているしフォワードはバスが全然なく、コンビも悪い、そしてほとんと敵のバックスのつぶしにあつてゐる。後半も同じ様な調子で栄光が一
点かえただけついにタイムアツ

以上まだ書けば、きりがないが、常道としてこの辺で敗因をさぐつて見よう。

この極な点の開きがあつたにもかゝわらず栄光は善戦した、これは自負しても良いだろう。しかし神奈川県に於ける栄光本来の力を発揮するまでには至らなかつた確かに垂崎は強かつた。そして我々よりサッカーを知つていた。そしてフォワードのバックスに当らせない早いパス、そしてボールを持つていかないものの動き、バックスの巧みなマーク等学ぶべき点も多

かつた。しかし栄光が調子を出して、いれば大して恐るに足らない相手であった。そしてこの原因はなにかニュースフラッシュにも書いていた様に遠征の疲れ、練習が充分出来なかつた。神奈川県内では見られない試合、観衆が多くて上つてしまつたこと等が上げられる。前者二場にはいろいろ理由、対策もあるが、最後の二場についてまず文句を書こう。

確かに我々は善戦した。しかしそれが勝とうという積極的意欲へ結びつかなかつた。こんな所が口号をなくした主な原因だろう。スポーツは遊びである。しかしそれは単なる遊戯ではない、心身の鍛錬にその最終目的を置いている。

特に団体競技は勝とうという全員の意気投合、一致団結が社会に入つた場合、社会を団結してよくしようなどうことに通ずるのではないかだろうか。そしてこれは積極的方法に訴えてこそ意義がある。上がりることは明らかにそのものに何等かの氣のゆるみがあるのだと思う。要するに全員が一致して互いに信頼し合い、全力を尽すことに徹すれば他のものの余地はないようと思える。

神奈川県内では見られない試合といふことに対しても我々のファイトの出し方があいまいであつたといえる。栄光では練習の少さをファイトで補うといわれる。しかし自分達が調子が出ない時にはしばしばファイトを失つたり、上つたりする時がある。これでは眞のファイターとはいえない。今度の

ように敵が名門だつたり又我々よりもサッカーを知つてゐること、敵の元であること、これ等のこと、とにかく逆に攻め上げていくような強さ、因太さがもつとほしい。これらを改良すれば我々のファイトは申し分なくなる。そして最後に栄光サッカー部はこの敗戦にくじけてはならぬといいたい。首も『ローマは一日にしてはならず』といふ諺を知つてゐるだろう。これはこのことと左知実に物語つてゐるのだ。栄光は今や基礎の時代は終りつつある。これは先輩諸兄の努力にむくいるところだ。そして現在これからは肉づけの時であると思う。外に対してもサッカー部がより大きくなる発端だ。その意味で今度の敗戦は決し

の何物でもないのだ。ではこうい
う点を考えて大いに頑張ろうでは
ないか。

で無駄ではなかつたといつてよい。
昨年、全国大会に破れてその後の
反省会で我々の基礎技術の欠陥が
わかつた。そして今年は基礎技術
の点では昨年よりかなり力強く、
またしつかりしてきている。わす
か一回の敗戦でこれだけの進歩が
あつたのだ。そして又今度の敗戦
で更に大きく伸びようとしている。
であるから現在の高一、中三、中
二、中一……の人々に今度の経
験を単なる出来事として見てもら
いたくない。それにより今年の神奈川
県の全国大会予選を見てもレベル
の低い神奈川県でも除々に力が上
ってきたのが解るだろう。他の学
校は比較的練習量に恵まれてゐる。
だから練習量の少い我部がこれに
対抗していくには人一倍のファイ
ト、努力、忍耐、研究向上心の他

トータル

橋	美	塚	木	伯	藤	郷	沢	島	駒	田
伊	孕	佐	々	加	東	金	網	生	岩	
G	K	R	B	L	R	H	C	L	R	I
G	K	B	B	H	H	H	P	C	R	W
F	P	C	K	I	I	I	C	L	I	W

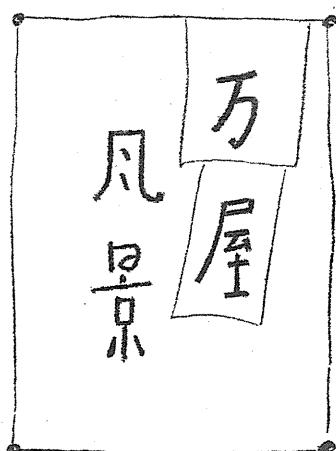
並 崎
5
— 3 — 1 0
2 — 1 — 1
榮 光

食事（七日夕食）

「瞑黙」「……」「イタタ
キマース」待方に待ち、じらしに
じらされた、待望の食事だ。

十数名の餓鬼の食うこと食うこと。
皆はじめの五、六杯は無我夢
中、たゞザクザクとかき込む音が
するのみ、その中皆一息つくと確
にベチャクチャとオシヤベリが
始まる。

「皿ばかり充份テツカイナア
ソースとつてくれ



「オイ、人のオカズまで食うな
よ、その中にメジさんゴトンカ

・就寝

ツを配つて歩く。このメジさん一人でトンカツを三枚食つてしまつた。又反対側の限では「井街はメシを食うのもロードレースと同じ位早い」という評判が立つ。

「お茶を下さい」

という声がアチコチからかゝる。そして皆が「やつとこれで生きた心地がする様になつた」等といつてゐる頃、ますます馬力をかけてこれからだじいした顔をして食つているのが例のオテン、篠塚君だ。

「九杯までは確かなんだが……。」しかしさすがの彼も全員、友中さん、山梨大学にいた先輩の佐伯の兄さん等の注目をあびてはどうも向が悪く、やつと食事も終つた。

先生が（怪）「快談」をしてやると、いかにも「わざう」に声を低くして始める。

「ある所にネエ……」

なんだつて、

――どうだ、コワイだろう。」

「ワツハツハ――。」

とまあこんな調子でおよそこれ

くない怪談は終る。その中皆黙つ

てしまう。キット明日の事を考え

ているのだろう。ふと見ると向う

側の蒲団が二つ空いてゐる。誰だ

ろうと考えて見ると青木と生駒だ

、あの二人は凡呂にいつてまだ

帰つてこない。ウタツチャツタか

な。隣りの金沢に「オイ、あいつ

らの枕を隠しちまオウ」という訛

で枕をどこかへ投げてしまった。

勿論真暗だからどこにあるかわからぬ。その中廊下で話し声がす

る。青木と生駒だ、あの二人は「二」で寝るということを知らないんだ。凡呂にいつてしまつたから。

何しろスルイヌルイと一時向位入つていたらしい。

「オイ、皆どこで寝こんだ。」

「こゝだらう。」

「あけて見ようか。」

ガラガラ

「馬鹿野郎、こゝは便所じやあ
ネエか。」

「しようがネエ、下にいつて聞
いて来ようが。」

この時余程黙つていようかと思
つたが、ベンをかいしている二人が

可哀いそうになつたから、戸をあ
けて「オイ二」だよ」と呼んでや
つた。「やつぱりそうか」といい
ながら入つて来た、ノツボとチビ
ます、「アレ、枕がない。」そこ

で知らん顔をしていつてやつた。「
こんなに遅く来て、チャンとした
床に入ろうなんてトンデモナイ。」
ぶつぶついいながら、それでもど
うやら、やつと蒲団に入ったらし
い。ところがチビの方はうよくお
さまつたが、ノツボがさわぎ出した
「ウワー、足が出るまう」

しかし、それも仕方がないとあき
らめたか、やがて静かになる。
しかし、それも仕方がないとあき
らめたか、やがて静かになる。

人物寸描

○×△民

薬学に関する知識に乏しく、サ
ロメチールの代りにネリハミガキ
を足にぬつたのは有名な話、又、カ
レーを耳で食べた最初の人。

趣味は硬貨（コ・ウ・カ）を靴の台

でたたきつぶすこと。但し一円硬
貨に限る。この趣味が彼の英語の
成績が悪いことに原因をもつてい
るか否かは余の知る所にあらず。

彼の国語のノートは骨董品の部
類に属するので有名。内臓ま
と骨袋とかいう等もある。

彼は刻み煙草の愛用者で
行く時は必ずキセルを



八期生

塩谷晋策

防大遠征
塩谷晋策
一九五七年十月二十六日(土)
(うすぐもり)
台風十九号が東南海上を通
過して、天気もまだ回復していない
い、この日、我々蹴球部は、かね
て予定していた対防大戦(二軍)
を行なった。

馬堀から来つたバスは特別に我
々にあつらえたように、他に誰も
乗つていないので、さつそく栄光
蹴球部専用車ときめこんだ。そし
て今、急な凹凸の坂道をあえぎな
がら小原台へと上つて行く。白く
防大の校舎が点々と見えだす。或
る人が言つには「さすが防大だけ

イツバチは、用事があつてオート
バイで乗リつけ、ガーチヤンと東
郷さんは一台電車がおくれた。
お世辞にも良いタラソンドとは言
て行なつた。

集会所で着換えをする。

イツバチは、用事があつてオート
バイで乗リつけ、ガーチヤンと東
郷さんは一台電車がおくれた。

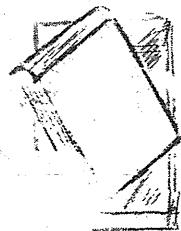
その人の案内で第一大隊のせ

りに感心する。バス

防大のサッカーチーム
シューも迎えて下さる。

出で、試合前の軽い練習をする
いよいよ試合開始……
前半栄光がチャンスをうまくつかんで一点先取した。がその後、
グランドコンテストイションが悪いため両軍得点ならず、試合終了の木

イツブルが鳴り、結局、一対〇で勝利をおさめた。次に春の対相



遠征記

防衛大学遠征記

洋戦以来五試合目の勝利であった。

告げバスで一路ネオンのはなやか
な横須賀へ帰つて来た。

撮影をし、皆のまことに顔を力メラ
におさめた、凡呂があるので皆よ
ろこんで入り体を清めさっぱりと
する。皆、着換がすんだ頃、チャ
ー・ショーハ早川さんへ栄光卒業生
が、防大内外部を案内して下さ
る、その後で、――エヘヘ――
聞いてやくなよ――おづつでもら
つたんだ、それから西木さん、ど
うも試合中にボロ／＼球を落して
いたと思つた（今度はサイン）空
っぽらじい）を落してしまい、騒
動持ち上つたが、防大幹部の役力
（？）により無事見つかつた。

たとうり、中学部員が乗つて来た
彼等も今迄、練習していたのだけ
だ、しかし我々が今日の自慢話を
すると、練習のつかれもどこえや
ら、自分達が勝つた様に喜んでく
れた。

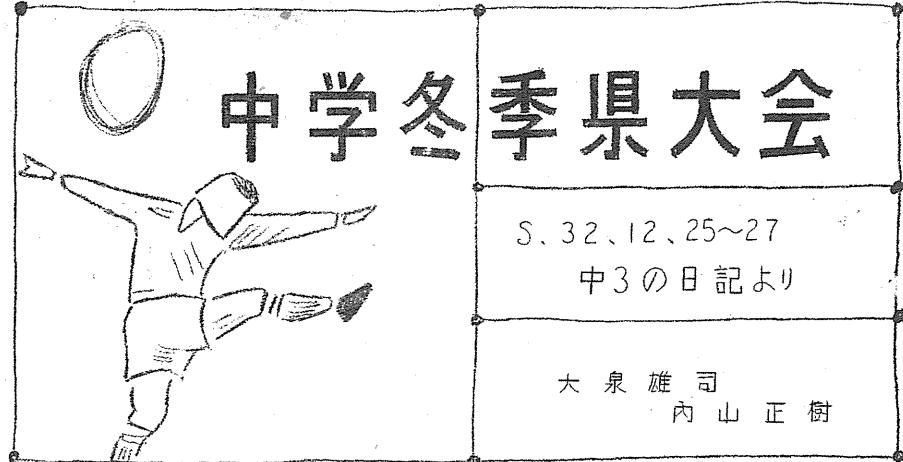
RW栗郷
RI生駒
CF栗田
LI金沢
LW塙谷、井衛

GK
GK
GK

試合に
つい

GK 伊藤 青木
RB 奥田 伸佐美
LB 篠塚
RH 佐々木
CH 佐伯
LH 小川、加藤

栄光学園 1 [1 - 0] 0 防衛大学
(三軍)



中学冬季県大会

5.32.12.25~27

中3の日記より

大泉 雄司
内山 正樹

第1回戦 中綱大対湘南高校 於 湘南高校

栄光トスに勝つ
て、凡上に陣をと
つて敵のキツクオ
フで試合の幕は切
つて落された。試
合が始まつてから

終り迄栄光のペースで試合を進行
させていた。この日の栄光には、
ファイトも完全に敵に圧倒して
いたが、直接に得点とは結びつ
かなかつた。しかし始終敵ゴール
を襲つて、遂にし工佐藤がペナル
ティエサヤ附近で球をキヤツチし

と同時に出て来た敵ゴールキーパー
の頭上を抜いて、コール前に上
げれば、これをC.F.大泉がヘッヂ
イングで決めた。

後半

後半は栄光のキツクオフで始ま
つた。前半走り回りすぎたか、皆
つかれて精彩を欠いたが、それで
も栄光は押し続けていた。しかし
ゴールに迫るが、もう一步といふ
所で押し返されていた。C.F.林(敏)
がいいない事は、早大で八重樫を被
いたと同じだつたのを、F.W.のメ
ンバーを新しく構成し、又ファイ
トを出し、又各人の実力をフルに
使って今日の試合を勝ち得た。今

日の栄光の攻撃はR.H.石原の活躍
で左右に大きく蹴つて、敵の守備
をゆるがして得点するといったも
の。前を横切つたのをつかみ、これ
絶対有利な立場となつた、試合を
見にした。次いでR.W.菅沢がゴー
ル前を横切つたのをつかみ、これ

のだった。が後半に至ると、敵ハーフが堅実に栄光センタースリーをマークしていた為に前半程の効果はなかつたようだ。しかしダイムアッス寸前で敵ゴール前で混戦となり、それをDF大泉飛び込んでショートしてダメを押した。遂に栄光は明日のオニ回戦へと進んだ。

(大泉記)

第2回 戰 城山 戰 湘南高校

ハーフライン左
はさんで両校のイ
レスンが並ぶと、
栄光の方がやゝ大き
いが、城山の方が
ごついと言う感じ
がしてトスで栄光は場
所を逃ぶ。栄光は
試合前からファイ

ハーフライン左
はさんで両校のイ
レスンが並ぶと、
栄光の方がやゝ大き
いが、城山の方が
ごついと言う感じ
がしてトスで栄光は場
所を逃ぶ。栄光は
試合前からファイ

ル一矢からペナルティエリア内に
せまり、ゴロの強いショート、し
かしキーパーよく取つて逆襲にで
る。前半終了まじかに、RB林の

ハーフライン辺の見事なロビンク
を佐藤ヘッドインクショートで決
める。前半2対0をもつて終了、
焰む。試合前から降っていた雨が
止で城山を圧倒していた。

キックオフ直後、栄光のアタッ

クで敵ボールを薙い、前半十分は
栄光が全々押しており、時折敵バ
ックスのやゝ強いキックがハーフ
ラインを越す程度で、栄光ゴール
前の混戦状態の中から大泉球を拾
うと見事ショート、先取点でがぜ
ん活気づいた栄光は、フォワード
のパスよく敵陣をあばれ回つたが
、敵バックスのキックを取つた敵

LWが味方CH、RBのコンビの
敵を引き離すが敵もさるもの、度
々味方陣内に逆襲するが味方バッ
クスの強いアタック、或いはスラ
イディングタックルでのがれる。
遂にタイムアップ。勝つたのだ
。明日は準決勝、強敵六角橋とな
たる。ぜひ勝とう。ファイト、フ
ァイトでおしまくるのだ。

第3回 戰 角橋 決勝 (津)

我等イレスン頑張
れ！ ファイト！ ファイト！ フ
ァイト！

今日の準決勝に至
るまでに栄光は、大
綱及び城山中を轟く

連破し、一方伝統の六角橋は千代中を苦戦の末破つて、これ又準決勝に出て走了。

横浜地区隨一の六角橋はキヅクに優れ、湘南地区代表栄光はバスワークに於いて他のチームを圧倒していた。

敵方六角橋中学のキックオフで試合開始となり、六角橋は大きいキックで栄光陣内に蹴込み、栄光バックスはうまくそのボールを取リ、フォワードにパスし、そのミスを六角橋中学は大きくキックして、十分頃までは五分五分と渡り合っていたが、尺工田代のゴール前突込みに成功し栄光先取点を挙げ、それまでの均衡は破れた。その頃から、栄光調子を上げて、六角橋中学を圧倒し出した。六角橋の語るバックスも栄光フォワー

ドの堅実なマークに奧力を發揮できなかつた。後半に入つて、一分〇七 大泉がゴール前迄ドリブルして左隅にショートをすれば、鮮かに決まって二対〇と栄光絶対に有利になつた。それ以後、栄光バツクも堅実な守りを示した。その為二十分頃になると六角橋にもあせりの色が見え出し、栄光のペースに巻き込まれて、何んらなす事が出来なかつた

遂に栄光待望のタイム、アッフルのホイップスルが吹かれ、栄光イレブン双手を挙げて喜んでいた。この試合で目立つたことは、し工佐藤(晃)と、しW山田の活躍であつた。栄光はこれで決勝に進出して、藤沢一中と優勝を争う事になつた。

第4回 戦
対藤沢一中 戦
= 決 勝 =

僕達中學 A

チームは毎日
おしつまつた

十二月二十七

田川家文書

との試合に、

引續考 藤沢

区リ一々戦

卷之三

、そ
う
が
れ

たので、これ

卷一百一十一

一時休
息も

大泉記

オーミングダッシュも充分の隙に見受けられた。

いよいよ試合は始まり、例の通り一中はすごいファイトでおしてきた。しかし栄光もこの前の試合でいかにファイトが大切であるか心得ているので、一中に負けないファイトでぶつかった。そして栄光は前半十分過ぎた位の時、し工佐藤よくダッシュして先取点を挙げた。しかしその後は一中万Bの猛烈なキックにフォワードも攻めあぐみ、一対〇のままで前半を終つた。後半に入ると栄光はやゝ疲れが見えてきて、ファイトも少しなくなってきた。そしてとうとうCJFに入っていた七番に又もや드리アルから一点入れられてしまつた。へ湘南地区リーグ戦に於ても、この七番に三点入れられている

。しかし栄光もよく攻め、太泉の惜しいシューなどもあったが、やはり攻畠の糸口を作るRHT石でいた。それでも栄光バックファイトでぶつかった。そして栄光は前半十分過ぎた位の時、し工佐藤よくダッシュして先取点を挙げた。しかしその後は一中万Bの猛烈なキックにフォワードも攻めあぐみ、一対〇のままで前半を終つた。後半に入ると栄光はやゝ疲れが見えてきて、ファイトも少しなくなってきた。そしてとうとうCJFに入っていた七番に又もや드리アルから一点入れられてしまつた。へ湘南地区リーグ戦に於ても、この七番に三点入れられている

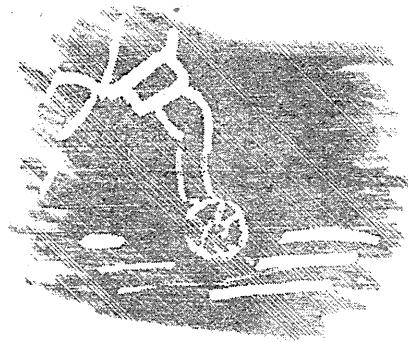
。しかし栄光もよく攻め、太泉の惜しいシューなどもあったが、やはり攻畠の糸口を作るRHT石でいた。それでも栄光バックファイトでぶつかった。そして栄光は前半十分過ぎた位の時、し工佐藤よくダッシュして先取点を挙げた。しかし、タッシュは、やゝまけ対一で後半を終つた。一対一なので休みなしで五分五分の延長に入つた。しかし両チームとも得点なく、更に休みなしで五分五分の延長に入つた。二回目の延長に入るとき、栄光は体力の差があらわれて、また、一中のファイト充分で元気なのに引きかえ、目立つて元気がなくなってきた。そして始めの五分間にCJFにロンタシューを決められ、更に、後の五分間にCJFに突込まれてしまつた。最後の延長は全く力尽きたと言つた感じだった。

試合が終つてから敗因を考えてみたところでは、そうなかつたが、大体、次のやうな事だと思つた。まずファイトの点ではほとんど負けていたが、技術は、トラップ、キックに一中の方がわずかに優れていたようだが、コンビなどの点では、決して劣つていたとは思わない。

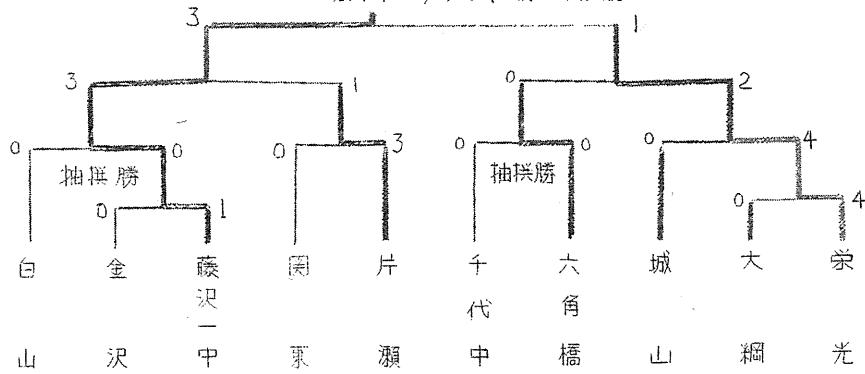
問題は、体力ということである。体力は完全に一中に劣つていた。泉頭さん達は、中学生で、一日に二試合やることは無理だと言つていた。

しかし、今度のように一日に二試合、しかも一二〇分もやる事があるのでから、体力を身に附ける事はやはり大切である。これは、練

習量と直結してくる事だらうが、
来年こそは、体力を身につけ優勝
してもらいたいものだ。



県下トーナメント戦一中優勝



メンバー
GK 林(吉)
LB 内山
RB 林(茂)
LH 布村
CH 田畑
RH 石原
LW 山田
LI 佐藤
CF 大泉
RI 田代
RW 松田

第四回戦		第三回戦		第一回戦	
(東)	(藤沢中)	(東)	(六角橋)	(東)	(大綱中)
12	GK	9	GK	0	13
1	CK	3	CK	3	0
2	PK	4	FK	0	8
0	PK	0	PIK	0	0
6	ST	9	ST	15	0
1	GI	2	GI	4	10

技 より も 気 を

四期生 頭 篤 二



湘南高校のグラウンドに着く迄は、何の変哲もない、あどけない少年の一團ではあるが、さて緑のユニフォームを着るや否や、たちまち彼等の秘めていた斗志に火がつく。緑の焰が。若々しく、そして強い十余の焰はグランドのあちこちに右往左往する。と、東の間に、ちらばつている焰は一つになる。ウォーミンタ・アッスとはその一つの焰を更に強くする事に他ならない。

どうしても俺は勝つ！
俺の焰は大風が吹けば、尚更、燃える、ヴィクトリーを掴む迄は決して消えぬ！」

事実、再延長の最後の最後迄、この焰は消えなかつた。必死の形相をし、あらん限りの力を出してタックをかます者、執拗に強烈なアタックをかます者、同僚を励ます者、彼等は未だかつて無い烈しい攻撃を受けて、体力以上の事をしなければならなかつた。相手にダメシで勝つ為には、先づ、極度の精神の緊張を常に維持し、その上疲労した重い体をとつさに動かす意志が必要だつた。先づ自分に勝つ事こそ相手に打勝つ事なのだから勝利への気迫そのものだつた。

「勝たなければならぬ。

益々強く、活発に燃盛る。

それはこう語つてゐる。

味方のネットは二度も軽かく揺れただけれど、炎は消えなかつた。

この大会で僕は気力のいかに大切かを極めてまざぐと見た。僕が今、焰という言葉で表現したものの正体こそ「気」なのである。気力のないチームは技巧のみにたよつて失敗した。六角橋が栄光に2-10でシャットアウトされたときはそのよき例だとと思う。勝負については技術は単に手段でしかない

崎戦、中学の予選での対藤沢一中戦がその向の事情を物語つてゐる。反対に気力の充満した試合振りというものは、全く見事なものである。多くの場合、全く相手を呑んでしまつてゐる。試合振りに余裕がある。従つて自己のペースで試合を進められるのであるから欠點もさほど現われない。

「気」は、栄光にとって特に重要な観察する必要がある。「技」には限界があつても「気」には限界がないからだ。又それは正しく学生のスポーツの求めねばならぬ点でも

限度がある。だから「技」で立ちあらがつていかなれば、勝利は向つては弱い。「気」で真向からでもない結果を導く。高校の対相

洋戦、対石神井高、対Y校、対並崎戦、中学の予選での対藤沢一中戦がその向の事情を物語つてゐる。反対に気力の充満した試合振りというものは、全く見事なものである。多くの場合、全く相手を呑んでしまつてゐる。試合振りに余裕がある。従つて自己のペースで試合を進められるのであるから欠點もさほど現われない。

「気」は、栄光にとって特に重要な観察する必要がある。「技」には限界があつても「気」には限界がないからだ。又それは正しく学生の谷間から這いつぶつて来た時は

あるからだ。何故なら「気」は征眼への強い執拗な願いであり、理想とか夢を描もうとする能動的な態度であるが故に若い者の持つ特權だと云えるからだ。

いつも素晴らしい試合をした。そ

つている。

度毎にグッと伸びた。しかし何故

君は敗北を好む様だ。

か優勝はしなかった。こゝに僕は

注目したい。彼等を僕がつき落す

番が未だ未だ。というのは決勝戦

で敗けた事は、彼等には極めて致

命的な敗北だからだ。今迄のどの

決して途中でくじけぬだろう。

谷よりも数倍も深いのだ。

「君は遂にビイクトリーをがち

未完成なるが故に

得なかつた。頑張つたけれども王

決してとどまる事を知らず

座はつかめなかつた。

見下す事も知らぬ者、

君は最後の十分で敗けたのだ。

ひたすら、上に上に頭をもたげ

先づいたるよく谷底まで落ちよ！

て、

君の上にまだ高き峰があつたの

歯を食いしばつて、休まず、

だ。君の登つていたのは最高峰で

絶えず高きへあこがれよ！

王者への道はそう遠くないだろ

う。

君の上にまだ高き峰があつたの

見よ！日光にまぶしく光る神祕

の白き峰が、君の前に立ちはだか

はなかつた。

奮斗の後――

。高いぞ！これは！

しかし、お前は「気迫」をすで

に知っている。

。「決勝の前の篤さんの」とば

。「うん全力をつくしきあいいよ

！ぶつたおれたらおぶつてやるよ

。」「決勝の前の篤さんの」とば

して、十一人の心に如実に感じら

れた。足を引きする者、坐り込む

者、ぶつ倒れるもの……

「篤さんおぶつてくれよ。」一

人が言う。「篤さんおぶれる？」

又一人が聞く。「何んだいその位

い」、やつとおぶつた篤さんも思

わぬヨロヨロする。「大きな赤ん

坊あめ買っておくれ。」そのはや

し声数分。いや数十秒しが繰かなかつた。「まいつたー。」早くも

篤さんひめいを上げた。

上智大の蹴球部活動

四期生・佐野光雄

上智大学の蹴球生活について書けと云われても、ちよつとまごつく。大学に私一人なら多少「ウン」めいたこと書けるが、我が蹴球部からの出身者として、永島、伊藤の両君、又部にちよいと顔をだしていた阿部先輩ともう一人豊田先輩がいては、どうも本当の事を書かざるをえないのに、創的要素の欠けることは甚だ残念である。

まず最初は、昨年度の成績を述べるのが、妥当で

あるう、一口にいって好成績であった。東大、日大と三連敗して多少部の中の空気が荒れたが、以後順調に日体大、学芸大、武藏大、青学大と勝ち、最終戦対一橋大に引分けたものの堂々三位を確保した。これには、やつてる本人達が予想しなかつたのだから、まして協会の役員又相手の選手達のおどろきはどんなものだったろう。その頃を私は、鹿鳴するだ

けで笑い、がこみあげてくる程、楽しく又愉快な思い出である。しかし、ここでおもしろい現象は、失点の方が得点より多いということである。このことは私達に大きな反省課題とし残ることである。これ七試合リーグ戦で思い出として残るのは、永島、伊藤両君の活躍である。中でも永島君の右十五度位の角度よりの逆点勝のシュート。日体大との試合での伊藤君の決死的なツッコミ。又これは、活躍でもないが、対東大での私の三度のハンド。これについては相当の説明なしでは理解しにくいが、要は、自軍ゴーリ前で相手所のシュートを手でとめ、それを手でゴーリキーパーの伊藤君へパスするという大搶クイーンアレー三度。

ここで話が元に戻るが私の入部当時の話をしよう。勿論永島君にすゝめられて入ったのであるが、入部して気が付いたのは、コーチのいることである。弟光時代全々コーチの顔をみたことない私にとっておどろくべきことである。はじめは、コーチを怖れおどろくべきことである。はじめは、コーチを怖れおどろくべきことである。はじめは、コーチを怖れおどろくべきことである。はじめは、コーチを怖れおどろくべきことである。はじめは、コーチを怖れおどろくべきことである。はじめは、コーチを怖れおどろくべきことである。はじめは、コーチを怖れおどろくべきことである。はじめは、コーチを怖れおどろくべきことである。はじめは、コーチを怖れおどろくべきことである。それはコーチというものはいいもんだよ。技術的の

みならず、色々の面で指導してくれるのだから。その点今の中三は幸わせだ。まがりなりにも（失礼）泉頭君が毎土砾みてくれるのだから。それからおどろいたことは、これはむしろ私の認識不足から来ているのかも知れぬが、上級生の技術が高いなあと痛感したことだ。高専学校であれだけ練習を積み、又二部へ上がりたての上智だからこれで当分間に合うと思っていたのは、ものの見事、的をはずれてしまつた。それから努力に努力を重ねてきてはいるが、まだそのレベルに到達できない。そんなこうなおどろいて、マリを蹴つている内に、新人戦がやつて来て、私はセンター、ハーフで出場した。「こ」で又どろもを抜かれたのは、試合が裏にきたないということである。手をおさえるのは朝飯前、あげくの果はパンツまでひっぱる。しかしここで、君達は誤解しないでくれ、大学選手皆そんなプレーをするのではない。弱いチーム程きたない。例えば今年の正月大会の時、一部の明治と当つたが、試合はきれいで、三対〇と負けたが気持は良かった。勿論上智はきれいすぎて相手がファイドがわからないという程の評判を

持つてますから御安心の程を。結局、夏の合宿に入る迄、私はおどろきばなしの状態だった。それ程大学の蹴球が高校のそれと差違を生じてはいるのである。最後にすこし紙面があるので、大学入部以来のめずらしい思い出を詰そう。夏の合宿の時の」とある。夕方近くあたりは相当暗くなつてきている。その日の練習の最後であるコンビの時、私がアタックしたら、そこに火花の生じたことである。その際、コーセーが「そんな火花位に感激せず、球を追え。」と云つたのをみても本当に火花の出る程のアタックが出発たのだなと一人得意になつていたものだ。しかし靴の裏のくぎで簡単に出来るものとわかり、相当ショックを受けた。君達の中でこんな経験をお持ちの方はあるだろうか。

上智の蹴球部について云えることは、これが又特長でもあるのだが、勉強を第一とし、勉強をした後で、楽しくプレーをするということである。この点他校とは違うかもしれない。要は「よく学び、よく遊べ」の句を実践しているのが、ファイターの主将のもとに、又我が栄光サッカー出身の永島君を副主将としている。上智大学蹴球部なのである。

創立五周年記念祭

日記より 生駒直樹

昭和三十二年
は、蹴球部が出
来て五年目。創
立当時から今日

の実力県下一に
至る迄の五年間
は、全く素晴ら
い発展を遂げた
五年間であつた
。その発展を記
念する為、五周
年記念が開かれ

年記念紅白試合とあって、第一期
は、蹴球部が出来て五年目。創
人という蹴球部始まって以来の会
合であつた。

の実力県下一に
至る迄の五年間

生徒全員九時迄に集合し、グラ
ンドに出て、開会式を行つた後、

直ちに試合に移つた。

尚この紅白試合は長時間に渡つ
てやるものではなく、十五分の試
合を何回も行つたのである。

中盤で球をとつた井街、ドリス
ルショート、キーパーミスで白軍
一ポイントリード。

第一回戦

中二を中心とする最初の試合、
中二は余りコンビネーションをや
つておらず、球のまわりに集まり

第二回戦

動きの少ない凡戦で0-10の引
分けの終る。

第三回戦

球がなかなか外へ出ず0-10の
引分けに終る

第四回戦

中二を中心とする最初の試合、
中二は余りコンビネーションをや
つておらず、球のまわりに集まり

動きの少ない凡戦で0-10の引
分けの終る。

第五回戦

球がなかなか外へ出ず0-10の
引分けに終る

中二は余りコンビネーションをや
つておらず、球のまわりに集まり

動きの少ない凡戦で0-10の引
分けの終る。

たのである。それは昭和三十二年
九月八日の日曜日である。
前日の台風の前ぶれかも知れぬ
と言われた強風と強雨も晩には止
み、朝からからりと晴れ渡り、タ
ラソードにはほこりが上らず、又す
べらばベストコンディションで、全
くの蹴球日和であった。創立五周

年の記念紅白試合とあって、第一期
は、蹴球部が出来て五年目。創
人という蹴球部始まって以来の会
合であつた。

R.I.永島さんがショート、1-1
の同点となる。

白軍は R.W 東郷のバスを、穎原さんショートして一点。紅軍は永島、中村、岩田のコンビよく、一点返して 1-1 の引き分け。

第五回戦

紅軍の一方的な試合で、白軍のフォワードが球にさわったのは、キックオフの時だけ。これで紅軍逆転して勝利をおさめる。

尚この後演芸会が行なわれた。

経過

赤軍 5					
3	1	0	0	1	0
1	1	1	1	1	0
0	1	0	1	1	0
					3 白軍

第五回戦

第五回戦

第一回戦

白	野村	本原	野杉	街代	谷田
唯	市林	山石富	宮井田	水飯	
林	藤山	畠山	畠川	澤藤	藤田
内	伊中	田及	菅佐	松佐	菊
伊	田	及菅	佐松	佐	菊

殊勲賞
石原博

九月八日の蹴球部創立五周年記念

念の紅白試合で私は最高殊勲賞をもらつた。そんな賞をもらう程の功ををしなかつたのにどうして私がそれをもらつたか。そのいきさつはこうである。

その日の会場の正面の机の上には、キヤラメルや、ビスケット等、が沢山つまっていた。それが最高殊勲賞だと早合点をした我々中三是、あれをごつそりもつて山わけしううということになった。

そして迷拳の時に組織票を投じた

その対応が私になつていた。

そして開票の結果組織票が成功して、しめしめと思つたのもつかの間、賞品はコケシをくれただけだつた。

中三の食欲のために私のところへころがり込んで来た賞であるから、部としても不本意であろう。
（しかし一応賞状には最高殊勲選手と書いてある）

その賞として私は今后の試合に於て大きな効果をして、殊勲を立て、最高殊勲賞を本当のものにした

いと思う。



（前半）湘南のキックオフ、林一山井とうまくバスが回つたがすぐ取られ

湘南のFW、林一山井とまに三点を入れ、三一〇と横浜を下して番狂わせ？を演じた。

都市対抗

横浜一湘南
10月3日

今日は、栄光に於ける都市対抗一回戦、湘南地区対横浜地区。この試合横浜の勝利？ 敵もさるもの

のひつかくもの、強情に戦い〇一〇の互角の試合。メンバーを見て

もわかる通り、とうてい互角に戦える相手ではなさそう！ でもな

いが、FWの得点力にはかなわな

いのである。横浜は、佐久間、佐

伯という主要選手がぬけたため相

手FWに入り込まれたのである。

（後半）

後半始めのうち横浜せめたてた

が、体力の差により小柄なFWは

続かずピンチが多くなった。が横

浜の加藤を中心としたバックの護

りはがたく、なかなか相手の得点

を許さなかつたが、終了十分前頃

から、FW調子に乗つて、続けざ

まに三点を入れ、三一〇と横浜を

下して番狂わせ？を演じた。

、横浜の攻撃となつたが、FW一度取られる。中盤で混戦からFW

球を拾いゴール前にせまつたが、

横浜のGK唯一野によつてしまは

されぎられた。又横浜もゴールか

ら菅沢一水谷一生駒一山田とわたり、しばぐせめ込んだが、最後

の押ししが不足して得点出来ず前半

終了

湘南 横須賀一

10月4日

なかなかの好試合であった。一言にして云えば面白かった。というのは両チーム高校生中心で、自己のボジションを良くわきまえている為、中二の如く(失礼)ボールに集まらず、バスもよく通り、又バックの必死の防ぎは見るべき所があつた。

湘南はオーテン欠席の為バックの力が弱まつたが、その穴うめに泉頭さんが加わつたのであるが、横須賀の東郷、栗田に力をされたのは面白かつた。湘南フォワードはCF林を中心として良くまとつていたが、前日程バックスは弱くなく、僅か一失を取つたのみであるが、これに対し横須賀の東郷

ゴール前迄バスは見事であったが、最後の押ししが不足したのである。林もゴール前で一瞬の差でつぶされてしまつたのであつた。

前半 横須賀FWに四点続けられても両軍の奥力は互角であった。しかし両軍FWの高校生、ボールを持ち過ぎる事が多く、この試合で見事なカンバツクを見せた栗田、山井、そしてバックをよくリードした佐々木のフレーは光つっていた。

横浜一横須賀

10月5日

中学と高校の試合同様であつた。前半続けざまに四点入れられたが、これに

中学生が粘るのは、全く素晴しく又将来が楽しみである。ハマは今年は負けたが、持胸が豊富の為次年は負けたが、持胸が豊富の為次

の棱会が楽しみである。
大泉、栗田のコ・ヒで中盤より後半へとのぞんだ。後半は中盤に於て互角であった。これはCHWを相当苦しめた事を物語つていい。前半の称なバスワークは見られず目くらバスを行う横須賀に対し、調子づいたのが横浜FWであるが、持つて行くのが一人では無理な事であったが、横須賀が一点追加してから、横浜遂に一点を取り返した。今日の試合で一番忙いのは加藤である。こゝに横須賀

くそらず横浜はガングバッタのである。

蹴球部に入つて

北村富治康勝多中也

十駒

北村富治

のではずかしかつた。

中一は、二学期になつてから初

めて部に仮入部する事が出来た。

僕は一学期のうちから蹴球部員の激しくつらくても我慢して練習するという男らしい活動を見て、蹴球部に入るうと思つていた。

二学期がやつて來た。僕はすぐに入部届を出した。その時仮入部したのは、僕の他に一人いた。届を出してから一週間後、初の練習日が來た。僕はその前日から、うれしくて胸がワクワクしていた。遂にその日がやつて來た。土曜日だつた。放課後僕は部室へ飛んで行つた。練習は二人きりだつたのでさびしかつた。又指導される部の方もあまりよく知らなかつた。

現在我が蹴球部は他校と比較し

その後、四人入部して中一部員は六人となつたが部の上級生はいつも次の校にこぼしている。

「今年の中一は意気地がない。

何故蹴球部に入らないのか、少なくとも十五人は必要なのに……。僕達も他の同僚を入部させよう努めているが一向に入部しない。皆は、

「中二になつたら入る」

「こわいからいやだ」

等と言つて逃げてしまう。蹴球部

は練習を見るところがわい極だが「わくなく楽しい。そして部の上級生からはかわいがられ本当に良い部である。こんなによい部は他にはないであろう。それなのに何故入部しないか不思議である。

て非常に強い。そしてその強さはチームの沢山の強い選手が心を合わせ一体となつてこそ生まれてくるのである。だがその強い選手産もやがては卒業する。すると次の学年の者が選手となる。そうなるといつも僕達にも選手となる時がくる。その時には全力をつくして栄光学園蹴球部の名声を傷つけない様にしたいと思う。

それには今から眞面目に練習をし、テクニックスを身につけておかなければならぬ。又スポーツ学園蹴球部の名声をいやが上にも高めていきたい。

多田勝康

僕は友達にすゝめられて、サッカー部に入った。

最初はおつかない人がいるかなと、思つてびくべくしながら入部届をだした。がみんなやさしそうな人ばかりなので安心した。

サッカーチームに入つてからだいぶ友達が出来て、僕は部活動がおもしろくてしようがないようになつて

また。そしてたくさん練習をして上智大の永島さんよりも、もつとうまくなつて、将来大学などに進学したら立派なサッカーチームとして試合に出たい。

そのためにはもちろん練習というものが大切なのであるから、一生県命練習にはげむつもりであります。しかし僕は体がちいさいので疲れやすいですから、この冬休みにたくさんたべて肥りたいと考えているのですが、どうもうまくいきません。しかしなるだけ丈夫な体をつくって、学校で練習する時もへたばらないようにと思つています。又教えてくれる人もおでんさん、佐久間さんなどみんな良い人ですから、僕達もその教えにそつて基本をしつかりマスターしようと思つています。

て前進する時の球のあつかい方の
うまさにはたゞほう然と見ている
だけです。僕はこの二つの試合を
見て学ぶ所が、へまだ学ぶなどと
いうがらではないが、たくさんあ
りました。

サッカー部に入つてという題で
書いたのですが、題と内容とが一
致しなくなつてしましました。

中 村 公 也

でも皆と同じ様に最後までがんば
つて走つたので、なんとも云えず
気持がよかつた。

それから毎週走るのはいやだつ
たが、「これが一つのたんれんなの
だと思つて走つていると、この頃
では前ほどつかれなくなつた。部
の上級生は皆親切に教えて下さる
。しつかり練習していると、僕も
そのうち試合にはやく出られる様
になればいいなあと、考えてい
る。

僕がサッカー部にはいったのは
九月だった。九月の工賀日北村
君と上級生の練習をみているとや
りたくなつたので、二人で部屋の
トレパンをはいて、高三の人科教
えてもらった。その日は余り走ら
なくて良かつたが、その次の時は
他に一年生が三人入つて来て五人
で練習した。練習が終つて運動場
を走られた。三四回の頃はよか
つたが、それ以後になると苦しく
なりつかれて來た。僕は太つてい
るので走るのは辛い。だがこの苦
しいのを我慢しなくてはと、思い
ながら走つた。走り終つた時は目
の前がくらくする様に思つた。



中2の文集

初試合 町田晶生

対三崎戦 小沢

対片瀬中戦 富野暉一郎



刃 試 合

町田晶生

十一月十七日、この日は中二蹴球部員にとって記念すべき日だ。何故ならこの日に僕達は藤沢一中左相手に初めて対校試合をやったのである。中二部員全員が集まる程のはりきり旅で、皆ファイトが満ちていた。電車やバスの中でもわくわくしてしまって、試合の事をしやべらすにはいられなかつた。県営グラウンドに着くと、中の生徒がもうユニホームに着換て軽い練習をやっていた。ぼく達も急いでユニホームに着換えたり、便所に行つたりして、さつそくグラウンドに飛び出し、泉頭さんと高丘のガアちゃんの指導で軽い練習をやつて、調子を整えた。みんなそわくしてどうも落着かない。便所へ行く者がいっぱいいた。「ピーツ」と試合開始の笛が鳴った。栄光のキックオフだ。さくよく前へ大きく蹴り出し試合が始まった。栄光がすつと押し気味でバックスは割合と楽だ。しかし一中のバックスが強いのか、栄光のフォワードが上っているのが、なかなか点が入らない。そのままハーフタイムになってしまった。佐々木主将に「いいチャンスがいっぱいあるんだからつぶさずにがんばって点を入れるよ。」と励まされ、「よーし」とばかりに皆張り切つて後半のゲームに入つたが、どうも上っているらしく調子が出ない。そのままがるぐと0対0の引き分けで試合は終つた。

しかし初試合なので全員はリキリ、最後の体操のランニングでも足には力がこもり、かけ声も気合がこもって気持ちが良かつた。

対三崎戦、四点を入れて

二年 小沢

今、試合開始のホイスルが鳴らうとしている。今日は高校の練習があるので、専さん一人しか来ていない。けれども中二の面々ものすごく元気にあふれている。ピーツ、始まつた。C.F.松田は落ち着いて球をし工滝本にパス、それをR.W.のぼくに蹴り出した。ぼくはタッショウして取りに行つたが、「B木スクヒシ」も走つて来た。ところが一瞬間に合わないと分つた。

僕は考え方直し球の行方を見る上、レフト側でし工市村、し工滝本をキープし、二、三歩ドリブルした。もう隨分ゴールにせまつている。滝本は真中へパスした。丁度僕があるので、専さん一人しか来てない。けれども中二の面々ものすごい。けれども中二の面々ものすごい。僕はそのまま走つて、とC.F.松田の真中あたり、「まか」といふ。松田は真中あたり、「まか」といふ。僕はまかし自分は前

しとけー！」そくさけぶと、松田はぼくにそれをまかし自分は前にタッショウした。ぼくは夢中になつてその球をドリブルし、中へくいこんだ。キーパーは右側に寄つている。僕はその時冷静だった。だからゴールの左隅をねらつて蹴つた。ネットがゆれる。初めての

ファイトがなさすぎる。僕は考え直し球の行方を見る上、レフト側でし工市村、し工滝本が健斗している。今し工滝本が球をキープし、二、三歩ドリブルした。もう隨分ゴールにせまつている。滝本は真中へパスした。丁度僕がいるので、専さん一人しか来てない。けれども中二の面々ものすごい。僕はそのまま走つて、とC.F.松田の真中あたり、「まか」といふ。松田は真中あたり、「まか」といふ。僕はまかし自分は前

しとけー！」そくさけぶと、松田はぼくにそれをまかし自分は前にタッショウした。ぼくは夢中になつてその球をドリブルし、中へくいこんだ。キーパーは右側に寄つている。僕はその時冷静だった。だからゴールの左隅をねらつて蹴つた。ネットがゆれる。初めての

めバンドでフリー・キック。それをGK唯野タイミンタが合わずして無念の一点を入れられた。その時の皆の顔はぼう然としている。特にがんばっていた林は例の顔で口を開いたままポカトーン。それからは皆ふん気して、こちらが押じ気味に試合を進めたがハーフタイムとなつた。丁度その時栗原さんが来てミカンを持ってきてくれた。首のどがゴクン。トクさんのが「皆半分づつ食え」と言ったのでそれとばかり。こうが普段団々しいのは得である。宮移が半分くれと言つたのを自分の口へポン。ああうまい。

後半は油断せずに戦い、試合を押して松田が一吳。僕は市村のセンターリングを相手のバックがヘンドしたのを突つこんで口にあて

て一点入れたり、まったくついていた。その後も一点入れ市村も僕のコーナーをナイフヘッドで一点と後半合計四点と失点で堂々八対一で鬼勝した。

野川田 藤村 沢杉田 本前地
一 唯及町 林 佐市小宮 松庵大菊
メンバーグループ
G K B B H H W R I F I W
R C L R R I C L L W

片中B戦の事

富野暉一郎

市村、林、唯野もAチームを行つてしまいポジションが大きく交つてしまつたからだ。グランドへ着くと、一中Bと片中Bがやつていたが、「先週どうして一中Bと引分けになつたんだろう」と思つたが、先週はあがつていた為だろうと思ひ直した。片中Bのフリー・キックが飛ばない事と小さい事が目に着いた。試合は芝生の方でやつたが、練習の時、みんな調子が良さそうだ。練習が終ると佐々木さんが、ポジションを正式に決めたが、終つてから良かつたなあと思つて、「終つてから良かつたなあと思う様な試合をやれ」と言う様な事を言つた。センターレーサークルに集まつたら、相手は二年生は一人しか居ないであとは全部一年生だと言う事が解つたので、みんな少し余裕が出て来たようだつた。キツ

クオフは栄光が取つたが、この時のキックが大き過ぎたため、敵に取られてしまつた。しかしすぐ取り返して前に持つて行こうとしたが、敵がかたまつてしまつたので、なかなか前に行かない。八分頃 R H 小沢からの浮き球を J H 富野がトラップしてショート、まず一点入れたが、その後すぐ J H 富野がショート、又十三分ごろし工飯田がクリーンシュートしたが、いずれもオフサイドで点にならなかつた。それからしばらく中盤で争つていた（特に R B 及川のキックが印象に残つた）。十七分頃、ハーフライン附近から R B 及川が大きく蹴つたのを J F 富野がつっこんで二度、その後押してはいたが相手がかたまつてしまつて中盤の争いでハーフタイムになつた。

この間泉頭さんが「十点だぞ十奥」と云つたので、皆「よーし」とか「もっと入れちゃえ」等と言つていたが、小沢は「おれはもうだめだ」と云つた。後半になると、栄光はます／＼押して敵の球はほとんどのハーフラインを越さなかつた。すぐに R H 小沢がロンタショートをして惜しいところでキーパーに取られてしまつたが、十分頃】工飯田が R T 富杉からのパスをクリーンシュートして三点目を加えられた。それからしばらく中盤で争つた。其の後、栄光は、ます／＼押して球がいつも敵コールの前の力にある様に思えた。その間コーナーライン附近から R B 及川が大

声で、「十点だぞ十奥」鳴つた。反省会は中三の対戦中が終つてからしたが、四対〇で勝つた割にコンビが悪かつた（声が無かった）事が特に注意された。帰りにまんじゅう屋によつて殊勲者に、まんじゅうが一包づつ配られた。

田川 田沢 保林 池杉 野田 前
太及町 小大 小菊 宮富 飯大
メンバ
M K B B H H W I F I W
G R L R C L R R C L

尚、G K 太田は一度も球にさわらなかつた。

一本も入らなかつた。二三分頃 J F 富野が、R W 菊地からの左スライドンカしてダメ押しの一点を入れるとすぐ、タイムアップの笛が

最大の疑問？

かの有利な「盲腸」こと宇佐美

君にまつわるエピソードを二つ紹介しよう。

一つは、大分前のこ

とだが、欠席者が多くて練習にな

らすタラソードの真中にコロガシテ

下らぬ話をしていた時の事だ。何

で笑いだしたのかは忘れたが皆で

大笑いしていると、急に真面目な

顔して「盲腸君」曰く「あんまり

笑うとモウチヨウになるぞ。」

もう一つは練習の帰り道のこと

だ。例によつて外は真暗だった。

黙々と歩いていに「盲腸」がいき

なり去つた、「どうして夜になる

と眠くなるんだ？」俺ワカソウ

これが偉大なる（？）宇佐美盲腸君の最大の疑問という訳だ



ダッシュも二年目をむかえた。

創設の時は、奥田さんが大分骨を

折つた桺だが、その点今年は、奥

田さん等から色々指導、努力して

もうつたので大変楽であった。

△編集して気がついた事を、一言

言わせてもらう。

△同じ事を三べん繰り返す。どう

も原稿の集まりが悪すぎる。特に

ひどいのは先輩諸兄。よしよしと

言いながら、六人たのんで、五人

左は連続ふり逃げ？、高三の人及

び先輩に強く要求する。

△又部員全部に要望する、積極的

に書いてくれた人は僅か二、三人。

もう少し熟慮をもつてもらいたい

この雑誌を良くするか悪くするか
は部員一同の熱意にかゝつていろ
。我々こそは、といつ気になつて
投稿してもらいたい。

△る号は予算の関係から、予定を
大幅にかえ、四十頁になつたが、
そのかわり内容の充実に力を入れ
たが如何？

ダッシュ	昭和三十三年三月十日印刷
発行所	昭和三十三年三月十五日発行
印 刷 所	横浜市金沢区泥塗町一
編集責任者 佐久間 廉	榮光学園蹴球部

電話 (ア) 九七四三